

小特集・現在を生きる方向感覚

現在の状況がわたしたちに強いている課題を設定して、編集同人が、四百字七枚程度の小論を書くということを始めたのは、第五号からだ。最初は新型コロナウイルスに関連して、カミユの『ベスト』や詫摩佳代『人類と病 国際政治から見る感染症と健康格差』を取り上げた。これに次ぐ第六号の小特集は、村田紗耶香『コンビニ人間』だった。そして今回のテーマは、「現在を生きる方向感覚」とした。コロナが人と人との交通を閉ざしたことにより、わたしたちにもたらされた閉塞感は、ワクチン接種が始まったこともあり、いくらかは薄らいできた。しかし、コロナ後の世界は社会主義という名前の全体主義、資本主義経済の行き詰まり、日本という国の政治・経済の迷走、破綻などにより、明らかな未来は見えてこない。この現在をわたしたちは、いかなる〈方向感覚〉をもって生きていくのか、というのが今回のテーマだ。なにを手がかりに考えるのかは、それぞれの自由だが、いちおう共通の参考文献として、鷲田清一の『濃霧の中の方向感覚』（晶文社、一八〇〇円）が用意されている。

「見晴らしのよい場所」で「不在の他者」と出遭う

池上貴子

「自己を世界のなかにマッピングすること」、「見晴らしのよい場所」に立つこと、「不在の他者」を含み入れること、これらは鷲田清一のコラムのキーワードだ。

・自己を世界のなかにマッピングするというのは、じぶんを後方から見ることであると同時に、他者の視線をみずからの内に引き入れることでもある。そのためには対話

のセンス、さらにはどのようなように人と人を編むかというネットワークキングのセンスが要る。そういうセンスこそ、水平方向にはたらく「教養」の核をなすべきものだと思う。

〔水平方向の教養〕二〇一五年一〇月

・「科学とは、何よりもまずは『限界』の知である」として「世界は一つの視点からは見通せない」と知ることである。（中略）「見晴らしの良い場所」に立つには、「世界をより正確に立体視できるよう複眼をもつことであり、一つの事態を多角的に見られるよう一見遠回りともみえるいくつかの補助線を引けることである」

〔教養と専門〕二〇一七年〇月

・死者と未来世代、つまりはいまは不在の他者たちを含み入れ、彼らとの対話のなかで反照的に現在を描くこと

〔倫理〕と「エチカ」二〇一四年六月

「新型コロナウイルスVS人類」というハリウッド映画のような世界的危機を現実として生きる私達が、その壮大さに呑まれないために育てるべきは、こういった思考の種だと思う。ただ、このコラムから更に六年ほど経った二〇二一年の時点では、状況が更に変化していることから、あえ

て冒頭の三つのワードを現在我々が直面する課題に照射して掘り下げてみたい。そのためにはまず、「不在の他者」とは誰か、といまいちど問い直す必要があるだろう。

ちなみに、鷲田は「不在の他者」という言葉を「過去」

「未来」という時間軸の中で限定的に使っている。実際、彼のコラムには未来世代へツケを回したといった高度経済成長期を牽引した世代の「負い目」のような迷いが散見される。そこには「自分が為したことのけじめ」という倫理観があり、つまり、その倫理の先にはかつて自分の生きた共同体、生活様式、政治などへの信がある。コラムの中で、若い世代が地方や農村で起業することをことのほか肯定的に注目するの、そのかつて生きた共同体への信ゆえだろう。

グローバル経済という制御不能な「怪物」、物価・株価の変動も就労環境も翻弄され、また成長を止めれば経済は減びるという社会の強迫観念に身動きがきかなくなっている現状に見切りをつけて、もういちど経済の流れを場合によってはみずから修正したり、抑制したり、停止したりできる、そういう制御可能なものに戻そうということかもしれない。いいかえると、仕事と家族生活、仕事と地域生活を切り離さないという、本来ならあたりまえのサイズに暮らしを戻そうということかもしれない。